

象 潟

山田真砂年

全きを見せて丸花蜂宙に
血液のさらさら廻り藤盛ん
緑蔭うれし人待つこともまた楽し
蝮草山の上までバイク音
白藤の下に飯食ふ女かな
躑躅燦々けふを歩きし足洗ふ
蛙塗りの午后には罅の入りをり
蛙塗りを終へて閑かな夕べくる
味噌蔵に窓のひとつや若葉冷
土喰ふて燕は土手をひるがへる
キウイの花いかにもキウイになりさうな
燕の子丸裸なる路上の死
象潟の空に鳥海山残る雪
象潟の松籟もなき夕焼かな
代掻機大海をゆく舟のごと
青蛙九十九島を田が繋ぐ
代田風銀紙はがしつ渡る
紫陽花に火星の色も木星も
J o k e r のこゑなく笑ふ額の花
水底のやうや昼寝の幼稚園
袋掛け浅間山見飽きることもなく
豆の花茶封筒より請求書
葎切のこゑの間近やI K E A見ゆ
滴りを溢れんばかり手の窪に
半夏生群れて彼の世の仏たち
建ち並ぶ屋台や七日目の桜